

「ついには自分の息子に」¹

11歳のマーセラス・ガルスは、木でできたおもちゃの剣を振り回し、空想の馬に乗って空想の敵と戦う真似をしながら、両親の所有する古代ローマ時代の屋敷内のほこりっぽい敷地を走り回っていた。

「さあ、来るならかかって来い！」
そう叫びながら、マーセラスは想像上の敵を挑発した。そして剣を落とすと、想像上の傷を負った肩をおさえながら、土ぼこりの上に転がり込んだ。

「我に勝ったと思うのか！」 そう叫んで、マーセラスはトーガから木製の短剣を取り出した。その時、人影が彼の上を通り過ぎた。目を細めて見ると、それは、12歳のユダヤ人の奴隷少年ヨラムの影だった。彼は、金槌と釘と板を持って、馬屋の裏にある柵に向かっていた。ヨラムは、素早く立ち上がったマーセラスの方を振り返って、ほほ笑んだ。

「今日はどんな仕事を？」と、マーセラスがたずねた。

「夕べの嵐で壊れた柵を直すんだ。君の方は？」と、ヨラムが言った。

マーセラスは肩をすくめて言った。

「何も。ただ遊ぶだけさ。」

「ぼくもいっしょに遊べたらなあ。

一人で遊ぶのって、楽しいかい？」と、

ヨラムがたずねた。

「あんまり。ねえ、仕事が終わったら、

いっしょに遊ばないか？」

「何の遊び？」

「ガリア人と戦うんだ！」

ヨラムはニヤリと笑ってうなずいた。

「午後になっちゃうけどね。」

遠くの放牧場から聞こえてくる

馬のいななきと、木に釘を打つ音を

耳にしながら、マーセラスは再び

空想の世界にひたった。しばらくして、

彼は空想の世界の敵を激しく追い

詰めながら、柵に向かって空想の

馬を走らせた。

（飛び越えられそうだぞ。あまり

高くないし。） そう思ったマーセ

ラスは、手を伸ばした。

悲鳴がしたので、ヨラムは持って

いた金槌を投げ捨て、声がした場所へ

駆け付けた。ぎゅっと握りしめた



マーセラスの手からは、血が流れて
いた。

「柵を直してたんじゃなかったの
か？」と、マーセラスが叫んだ。

ヨラムは済まなそうにうなずいた。
「どうして、釘が出てるって教えて
くれなかったんだよ？」

「本当にごめん。板が全部きちんと
固定されてから、出ている部分を
平らにしようと思っていたんだ。
助けを呼んでくるよ・・・」

「呼ばなくてもいい。父上にこの
ことを話すぞ。むち打ちの刑になる
からな。」

「ただ仕事をしていただけなのに。
でも、本当にごめんね。」と、ヨラムが
言った。

「どうでもいいさ。もう、いっしょに
遊ばないぞ。2度とね！」

すると、白髪をきれいに編み
込み、サフラン色の衣をまとった、
優しそうな女性が近づいて来た。

「さっき、叫んでたわよね、
マーセラス。一体どうしたの？」

「あの柵を飛び越えようとしたら、
このユダヤ人奴隷が、板から突き

出た大きな釘をそのまま放っておいた
んだ。それで・・・」

「ひどい傷ね。」 血が流れる傷を
見て、女性が言った。

「母上、みんな、あいつのせいなんだ。」
マーセラスがうめき声で言った。

「今はそんなことを言ってる場合じゃ
ないわ。お医者様に診てもらわないと。」

「だけど、あいつは罰を受けないの？」
「誰のこと？」

「この奴隷少年だよ。」
女性は、うなだれてしょんぼりと突っ
立っている少年の方に目を向けた。

「ヨラム、柵の修繕と今日の仕事が
終わったら、夕食の時間まで、自分の
部屋にいて。」 彼女は穏やかに言った。

「はい、ドミティラ様。本当に申し
訳ありません。どうか、おゆるしを。」

「ゆるすわ。きっと、息子もゆるして
くれるでしょう。」

「いや。ぼくは絶対にゆるさないから
な。」 マーセラスは母親に連れられな
がら、そう言い捨てた。

護民官のクレメンス・ガルスは、屋敷の
敷居をまたぐと、羽根飾りのついた

ヘルメットをぬいで、額の汗をぬぐった。
妻は彼をキスでむかえると、彼の肩から
緋色の重いマントを持ち上げた。

「大変な1日だったのね？」

クレメンスはうなずきながら、つかれた
顔でほほ笑んだ。「文字通り、ひどく骨の
折れる仕事だったよ、ドミティラ。減税を
求める群衆を鎮圧しなければならなかった
からねえ！

だが、これを使わなくて済んだのは
幸いだった。」 クレメンスは剣を外し
ながら言った。「彼らの不満は解決して
あげたいが・・・

不満といえば、うちでは何があったん
だい？」 手に包帯を巻いて窓際の椅子で
うつむいているマーセラスを見て、クレ
メンスはたずねた。

「事故があったの。」と、ドミティラ。
「事故じゃないよ、母上。最近うちに

来たあのユダヤ人奴隷が・・・」

「ヨラムっていうの。」と、母親が
言った。

マーセラスは続けた。「父上。あいつは
柵を直していたとき、突き出た釘をその
ままにしていたんだ。だから、ぼくが柵を
飛び越えようとした時、その釘が手に

刺さったんだ。全部、やつのせいだよ。」

「わざとではなかったのよ。それに、
すぐく反省していたわ。」と、ドミティラ。

「関係ないさ。あいつがいなければ、
こんなことにはならなかったんだから。

医者は、もう2度と、まともに手を
使えるようにはならないだろうって。
剣や槍を握ることもできなくなるんだ。」

「何だって？ それは本当か？」
驚いたクレメンスが声を上げた。

「釘で腿が切れてしまったの。できる
ことはないって。」と、ドミティラが
言った。

「そんなやつは、明日、むち打ちの
刑にしてみる！」 クレメンスは胸を
打ちながら、大声で言い放った。

「あなた、ちょっと待って。ヨラムは、
自分の仕事をしていただけなのよ。」

「自分の仕事をしていただけだと！」
そこでクレメンスは、はっとした。

真っ赤になった顔が青ざめ、しばらく
行ったり来たりしていたが、その後
部屋を出て行った。まもなくすると、
彼は部屋にもどって来て、非常に慎重な
素振りでもーセラスのそばにひざまず
いた。

「カッとなってしまって、済まな
かった。私が今仕えている神の国の
律法に完全に違反していたよ。」と、
クレメンスは静かに言った。

「どういうこと、父上？ やつを
罰することが、神聖なローマの正義で
しょ。」

「息子よ。私が以前ユダヤの国で
歩兵をしていた時の話をしたのを、
覚えているかい？」

マーセラスはうなずいた。「丘で
反乱軍と戦った時のことでしょ？」

「ああ。それである日、私は3人の
男を十字架に磔にするという不愉快な
仕事を与えられた。」

「悪い人達？」

「二人は強盗で、もう一人のナザレ
人は・・・その・・・彼は・・・」

クレメンスは言葉に詰まった。唇が
震えている。

「嫌なら話さなくていいのよ、
あなた。」と、ドミティラが言った。

「いや、話さなくては。」 そう
言って、クレメンスは話を続けた。
「私はこの男の手に釘を打ち込んで
いた。耐えがたい痛みだったはずだ。

だが彼は、分かっているよというような
目で私をちらっと見たんだ。そして、
我々が十字架を起こして立てていた時
には、実にはっきりと、『父よ、彼らを
おゆるしてください。彼らは何をして
いるのか、わからずにいるのです。』と
叫んだんだ。私は今日に至るまで、
あんなに不当で残虐な目にあっている
のに、そのような言動をする人を見た
ことがない。」

「不当なの？ 父上、その人は悪人
だったんでしょう？」

「私の知る限り、彼は何も間違った
ことはしていなかった。それどころか、
良い話ばかり聞いている。ユダヤ人
なのに、百卒長のしもべさえ癒やして
下さったそう。誰かがふざけて書いた
のかもしれないが、頭上に釘付けされた
罪状書きには、3か国語で、ナザレ
出身のユダヤ人の王と書かれていた。

だが、私は単に自分の仕事をして
ただけで、きっと正当な理由で判決を
受けたのだろうと思っていた。だから
嫌な仕事の後は、他の兵士達といっしょに
3本の十字架の下に座り、酔っぱらって
サイコロを振っていた。」

「その後、どうなったの？」
「彼が息を引き取ると、3時間ほど、
空が真っ暗になった。非常に不吉な
雰囲気だった。当番の百卒長は、この
出来事でかなり動揺し、涙を流しながら、
立ち上がって、この義人は本当に神の
子だったと宣言した。何年かたって
彼が私に言ったことなのだが、その
ころまでにはローマ中に広まりつつ
あったキリスト教というものの創始者を、
私達は十字架にかけてしまったという
ことだった。」

「じゃあ、この信仰って、死人への
信仰なの？」

「彼は死んだままではいなかった。
私達が・・・いや、私が彼を十字架に
つけてしまったその3日後に、生き
返ったのだ。それを証言する人々が
大勢いた。最も親しかった人達もだ。」

「でも父上は、生き返ったその人を
実際に見た訳じゃないんでしょう？」

「ああ。だが、そう証言した人達には、
嘘をつく理由がない。彼らの証言を
聞いた後、私が彼を呼び求めると、
彼は私の心に語りかけて下さった。
私はゆるされたと行って安心させて

下さったのだ。」
クレメンスは、声を低くした。「マー
セラス。このことは、他の人に話しては
いけないよ。それから、母上は最近、
信者の何人かと知り合いになったそうだ。」
「本当、母上？ クリスマンと？」
ドミティラはうなずいて、窓際の腰
かけに座った。
「だけど、彼らは悪人だよ。かくれて
悪いことをしてるって聞いたもの。」と、
マーセラス。
「マーセラス。彼らは悪い人達じゃ
ないわ。彼らとの交流は貴重なの。
人目に付かないように彼らに会って
いるけれど、今までこんなに楽しい
人達に会ったことがないわ。友達や
親せきでもね。」 そう言うと、
ドミティラはクスクスと笑った。
「中には人の悪口を言う友達もいる
けど、この人達は、その場にいない
人達のことで、いいことしか言わない
のよ。とにかく、地下教会でも、人が
集まるのはどんどん危険になっていて、
ヨラムも両親が闘技場で殺されて
しまったの。だから、私達が彼を引き
と取ることにしたのよ。」

「ライオンにやられたの？」

ドミティラは窓の外を見つめながら、うなずいた。

「それで、ヨラムはあのことを知ってるの？ その・・・父上が、彼の宗教の創始者を処刑してしまったこと？」と、マーセラスが父親にたずねた。

「ああ、そのことは話した。ゆるしてくれたよ。ゆるしは、イエスが説いておられた律法なのだそうだ。」

マーセラスはだまってしまった。そして、母親といっしょに、沈みゆく太陽をながめながら、物思いにふけていた。

しばらくすると、マーセラスは母親にささやいた。「だから、あいつは親のことを話したがないんだね。」

またもや沈黙の時間が流れた。奴隷の娘が、羊のスープとパンと副菜などを持ってきてテーブルの上に置き、そそくさとして行った。

「父上。つまり、父上が・・・え〜っと・・・手を下さなければならなかったあの人は、本当に神の子だったの？」

「そういうことだ。あの時も、今もね。

それを知って、私は自分の行いを深く悔やんだ。だが、その後、十字架上で彼が言った言葉を思い出した。『父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。』それで、私は分かった。彼も、彼の父も、私をゆるして下さったということだね。だから、神御自身の御子が、このような私の罪でも父に願ってゆるしていただけるなら、私の一人息子であるお前が父親に、ただ自分の仕事をしていて、気付かなかったミスの中で、このかわいそうな奴隷少年をゆるしてあげるようお願いはずはないだろう？」

その夜、マーセラスはベッドに横たわったまま、なかなか寝付けずにいた。手がズキズキ痛んだ上に、心には葛藤があった。自分の神の手と足に釘を打ち込んだ者に対して、自分だったらどう振る舞うだろうか。それだけではない。今のヨラムのように、奴隷とは言え親切にしてくれる人達が、自分の両親をライオンの餌食にするのを黙認していたのと同族の人達だったら、どうするだろう？

自分だったら、どうしていただろう？

マーセラスだったら、ヨラムとちがって、ローマのことを何でもかんでも口汚くののしり、仕事をするにも腹立ちまぎれで、まして彼らの金持ちの子らと仲良くするなんてことは、絶対にないだろう。

ところがヨラムは、ガルス家に来た日から、マーセラスが怠け者で未熟であるにも関わらず、礼儀正しく敬意をこめて接してくれたのだ。

もしゆるしが必要な者がいるとしたら、それはマーセラスであり、彼の家族であり、そしてローマの人達だ。マーセラスはそう結論を出す時、眠りに落ちた。

翌朝、彼の顔はよく眠れなかった様子だったが、夕べ深く考えて出した結果には満足し、清々しい気持ちで奴隷達のいる区画に向かった。ヤギの乳しぼりをしていた若い娘達がクスクスと笑ったので、マーセラスは赤面して、トーガのほこりを払った。今にも逃げ出したい気分だった。

「ユ、ユダヤ人奴隷のヨラムを

探しているんだけど。」

「いないわ。」と、娘の一人が言った。「いないって？ 本当なの？」

「ええ、本当よ。ベッドは空だったし、持ち物もなかったわ。」

「きっと、夜の間に出て行ったんだわ。」と、他の娘が言った。「彼らの立場にはなりたくないわね。つかまったら、焼印を推されて、むち打ちの刑だもの。すごく大きな奴隷用の腕輪を付けてるから、すぐに見つかってつかまるわ。逃げた奴隷をつかまえると、かなりの賞金がもらえるしね。」

マーセラスはショックを受け、よろよろしながら屋敷へ戻って行った。日が経つと、ヨラムへの償いの気持ちが薄れてしまうのではないかと気がかりだった。屋敷のアトリウム（広間）に入ると、母親は奴隷の女性美容師に髪を結ってもらっていた。父親は立って腰に剣を装着しながら、仕事に出かける前に、大勢の男性奴隷達に指図をしていた。厨房からは、焼き立てパンの香りが漂っていた。だが、マーセラスの食欲は減退するばかりだった。

ドミティラは、マーセラスが明らかに悔しそうな顔をしていると言った。マーセラスは、父親が家で出ていくのを待って、母親に返事した。

「ヨラムが・・・いないですって？」 美容師を退室させると、母親がささやいた。

「うん。父上は、彼をつかまえた人に賞金を出すの？」

「おそらくね。」

「つかまったら、むち打ちの刑にするの？」

「おそらくそうなるわ。他の奴隷達への見せしめにね。そうしないと、父上は反抗の罪に問われることになるもの。」

マーセラスは頭を振って、床を見つめていた。涙があふれてきた。

「だけどね。賞金がなければ彼を引き渡してくれない、道徳心や節操のない人達の手に落ちる運命よりは、ずっといいわ。」と、母親が言った。

その時、廊下の方から、緊急の用事でドミティラ様に会いたいという

人が来ているという知らせが入った。

ドミティラは、息子をアトリウムに残して出て行った。マーセラスがそっとカーテンに近づくと、向こう側から静かに話す声が聞こえてきた。

「すぐに彼だと分かりました。」

「ああ、遠くへは行ってなかったね。

むしろ、こっちに向かってたくらいさ。クリスチャンだから、逃げようとしていたのを考え直して、自首するために戻って来たなんて、でたらめな話をしていたよ。」

「つまり、我々が彼を見つけたと

いうことです。」

「それで、ご要望は？」と、ドミティラがたずねた。

「ご主人が高額な身代金を提示するだろうことを考えれば、我々が提示する価格は安いものです。」

「では、なぜ主人の提示を待たないのかしら？」

「奥様、それは手の内の一羽に過ぎません。我々は、茂みに隠れているもっと多くをつかまえることができますぜ。」

「一体どういうことですか？」

「隠れているクリスチャン達の居所を知っているってことです。」

「そうですか。いくらご要望ですか？」

「たったの銀貨50枚です。」

「引き渡しの時にお支払いしましょう。

いつになりますか？」

「1時間以内に連れて来ます、奥様。」

その時間、マーセラスは前庭でうろうろしながら待っていた。

「何しに来たの？」 屋敷の階段を降りて来たドミティラがたずねた。

「母上、耳にしました。つかまえ

たって・・・」

門が開くと、馬に乗った男が二人、入ってきた。一人は手首を縛られたヨラムを連れ、もう一人は今朝の交渉人だった。男は馬を下りて、ドミティラにあいさつした。ドミティラはヨラムのなわを解くようにと言った。

「水飲み場で顔を洗ってきなさい。」

と、ドミティラは少年に言った。

ヨラムは、非常にありがたい気持ちで水を飲み、顔を洗った。マーセラスを見ると、顔をそむけた。

ヨラムはマーセラスに背中を

向けたまま、急に口ごもって言った。

「き、君の手・・・どんな具合かい？」

「う～ん、大丈夫。昨夜はあまりよく眠れなかったけど、大丈夫だよ。」

「そ、それは良かった。昨夜は君のために祈ったんだ。」

「祈ったって？ 神々に？」

「神様に。特に、神の御子にね。」

「父上が・・・あのナザレの人？」

ヨラムが振り向いて言った。「そうだよ、イエス様にね。」

マーセラスは、思わずつばをのんだ。そして続けた。「か、彼は、君と同じユダヤ人だったんだよね？」

「それはあまり重要じゃないけどね。エチオピア人だったとしてもいいんだし。」と、ヨラムが言った。

「どうして逃げたんだい？ それが危険だってことは知っていただろう？」と、マーセラス。

「昨夜、君の父上がぼくを

むち打ちの刑にするって叫んでいるのを聞いて、こわくなっちゃったんだ。」

「だけど、どっちみちそうになって
しまうか、もっとひどいことにもなり
える得よね。」

ヨラムはうなずいた。「そうだね。
だけど、ぼくが愛するようになった
君や君の家族からゆるしてもらえない
という傷の方が、辛いと思ったんだ。
だから、途中で考え直したんだ。」

「それで、自首することにしたのか
い？」

「うん。だけど、誰も信じてくれない
んだ。」

「それでね、ヨラム。・・・」と、
マーセラスが言いかけた。

ドミティラがこちらに向かいながら、
悲しそうに言った。「取引が成立したわ。
残念だけど、ヨラム、あなたを拘置
部屋に連れて行かなければならないの。」

翌日の早朝、ガルス家の人達と150
人ほどの奴隷達が、ヨラムが罰を受ける
のを見守るために集まった。ドミティラと
マーセラス、それに奴隷の娘達の泣き
声だけが、その場の重々しい静けさを
かき乱していた。

「父上、こんなこと、やめられない
の？ ヨラムは自首したんだよ。」

マーセラスが泣きながら嘆願した。

「すまないな、マーセラス。何か
他に手立てがあればいいのだが。
彼の脱走がうまく行っていれば、
見て見ぬ振りをすることもできたが、
母上も言っていたように、もし犬共の
手に落ちれば、もっとひどい目に

あうんだぞ。」

兵士が、厳格な表情でゆっくりと、
ほこりっぽい放牧場にヨラムを引いて
来た。中央には、血のついた傷だら
けの木の柱が立っていて、さびついた
手錠が取り付けられていた。険しい
顔の屈強そうな守衛がむちを持って、
兵士とヨラムの後に続いた。

「待って！」
兵士がヨラムの手首にその手錠を
かけようとした時、悲痛な叫び声が
響いた。

「マーセラス、一体どういうこと
だ？」 クレメン스는放牧場に入って
来た息子に問うた。

「ぼくがヨラムの罰を受けなくちゃ
いけないんだ。」

「何だって？」
「父上。ぼくがいなかったら、彼は
こんなことにはなっていなかったんだ

もの。」

「マーセラス、やめて！ 彼の身代
わりになるなんて、だめよ！」 ドミ
ティラが泣き叫んだ。

「ごめんなさい、母上。だけど、
ぼくはそうしなくちゃいけないんだ。」

「そんなことは許さないぞ！」と、
クレメンスが叫んだ。

ヨラムは守衛の手から抜け出して
マーセラスにかけ寄せた。「だめだよ！
そんなこと、君にはさせない！」と、
ヨラムが叫んだ。

「そうしなくちゃいけないんだ。」と、
マーセラスは落ち着いて言い放った。

ヨラムはこぶしをあげたが、マーセ
ラスはそれをたくみにかわした。

「マーセラス、この罰を受けさせて。
もし君が身代わりになんてになったら、
ぼくは真っ当に生きていけないよ。」

「どうして？」
「君はローマ人だろ。戦うことが
武勇になるんだろ？ ぼくは君を、
剣や槍を使えないようにしてしまった
んだ。」

「だけどヨラム、誰かが君の罰を
身代わりに受けるなら、君にも価値が
あることが証明されるんだ。」

「彼を止めて、クレメンス。力づく
でも止めるのよ。」と、ドミティラが
ささやいた。

クレメンスは力なく首を振った。

「お願いだから、ヨラム。ぼくがもう
剣や槍を使えないなら、こういう方法で
自分の武勇を証明させて欲しいんだ。」

ヨラムは足を地面にこすり付けて
いたが、やがて、目を輝かせて顔を上げた。
「それは変えられるよ。」と、ヨラムは
言った。

「どういうことだい？」
「手を出して。」
「何だって？」
「ぼくの手を握って！」

マーセラスは渋々ヨラムの手を握った。
すると、驚いたことに、このユダヤ人
少年は目を閉じて、マーセラスの手を
しっかりとつかんだ。

「ナザレの主イエス様。」 ヨラムは
見ている人達に聞こえるように、大きな
声で祈った。「あなたのいやしの力で
マーセラスの手に触れて下さるよう、
求めます。あなたの弟子マルコが書き
記しているように、あなたが萎えた手の
人にして下さったように、マーセラスの
手も、完全に癒やして下さい。」

マーセラスは息をのんで、ハッと
した。手に力がみなぎってくるのを
感じ、ヨラムから手を引いた。

「包帯を取って。」ヨラムが静かに
言った。マーセラスは守衛にナイフを
借りて、包帯を切りほどいた。

全く信じられないといった眼差しで、
マーセラスは指を動かし、ナイフの
柄を握った。それから頭を横に振り
ながら、嬉しそうに笑って、驚いて
いる両親にその手を振った。

「父上！ 剣が握れるようになった
よ！」と、マーセラスが叫んだ。

見物人達は歓声を上げて、拍手喝采を
した。ヨラムは毅然とした様子で木の
柱に戻り、兵士に両手を差し出した。
守衛は、たった今起こった奇跡には
全く無関心のようで、自分の仕事を
果たすためにむちを空で打ち鳴らし
始めたので、マーセラスと観衆が抗議の

声を上げた。マーセラスはクレメンスの
方を見て、合図を待った。

護民官のクレメンス・ガルスは手を
挙げ、頭を横に振った。

「真のローマ帝国の伝統に則って
両者が示した、このような高潔さと
勇気を罰したい者はいらるだろうか？
もしいるなら、前に出よ。我が息子の
手を癒やして下さった、ヨラムの王で
あり、神の御子でもある方の言葉を
借りれば、『そのような人に最初の
石を投げさせよ。』」

その場が静まり返って人々が見守る
中、兵士は両手を挙げて立ち去った。
すると守衛も、頭を垂れ、むちを投げ
捨てて、兵士に続いた。群衆は歓声を
上げた。ドミティラも奴隷の娘達も、
今度は喜びのあまり、むせび泣いて
いた。クレメンスは、その夜の祝宴の
ために準備を命じた。

クレメンスは、満たされた聖杯を
掲げて言った。「ここに、ヨラムの
自由を宣言する！ そして、奴隷の
腕輪を正式に外すものとする。」

横に立っていたヨラムは、主人と
その奥様の好意で、見事な刺繍の
施されたトーガをまとっていた。

ヨラムは会釈して、歓声を上げている
客にあいさつした。

「我が主人の御恩に感謝しています
が、私はその自由を放棄いたします。

そして、クレメンス・ガルス様と
ドミティラ様の高貴なお家にお仕え
し続けたいと思います。私を気遣い、
まるで息子同様に良くして下さい
からです。」

クレメンスはほほ笑んで、ヨラムの
肩に手を置いた。「その通りです。
私と妻は、その気遣いを正式なものに
したいと思います。」

「どういことでしょうか、旦那様。」
「明日、私は養子縁組の書類を作成
します。」

ヨラムはあっけにとられ、歓声を
上げている群衆に言う言葉を失った。

すると、ドミティラとマーセラスが
前に出て来て、ヨラムを抱きしめた。

遂に、涙でかすんだ目にほほ笑みを
浮かべて、ヨラムが言った。「箴言に
書かれた、この言葉は本当でした。
『しもべをその幼い時から大切に
育てる人は、ついにはそれを自分の
息子にする。』」¹

「それは名言だな。誰の言葉かい？」
と、クレメンス。

「我が民の最たる賢者の一人です！」
と、ヨラムが答えた。

お
終わり

脚注：

¹ 箴言 29:21参照

文：ギルバート・フェンタン 絵：ジェレミー デザイン：ロイ・エバンス

出版：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2021年、ファミリーインターナショナル

"A Son at the Length"--Japanese 関連の読み物はこちら ⇒ あわれみ、ゆるし、イースター、子供のための物語